『グローカル天理』第３号（通巻 27 号）掲載論文要旨

井上昭夫　「巻頭言　「天理異文化伝道」学への期待」

平成 15 年度より実施される天理大学改革 においては、「建学の精神」に沿った新しいカリキュラムとして「国際協力論（実習を含む）」や「天理異文化伝道」が組み込まれた。建学の精神は、天理異文 化伝道学が他の学問と有機的に関連づけられ協調することによって、未来の展開の視野が開かれる。

荒川善廣　「「元の理」の探究（12）―人間と存在［３］」

有機体の哲学（the philosophy of organism）によると、生きられた過去の経験は、消失することなく、「客体的不滅性」(objective immortality) という資格で保存されている。「客体的不滅性」は、宗教的表現では、「霊」（たま）と呼ばれている。一方、「魂」（たましい）と は、そこで人間のすべての経験（身心現象）が生起する「場所」（locus）を意味する。出直し・生まれかわりの教理と祖霊を祀ることが矛盾を来さないた めには、霊と魂とを区別して考える必要がある。つまり、魂は別個の人格として生まれかわるが、霊は終息した特定の人格が永続的に（everlastingly）影響を及ぼす姿にほかならないのである。

宮田元　「宗教・スポーツ・教育（６）―宗教とスポーツ［５］」

フロー体験（flow）、すなわち最適経 験は、精神を集中し、目標を設定していく中で、心に喜びと楽しみをを生み出してくれる。フロー体験は、仕事を通して起こることもあれば、思考の中で体験す る人もあり、さまざまな場面でみることができる。身体を使って得られる最適経験を考えるとき、水泳から楽しさを得るには、その運動に必要な能力を洗練して いかねばならず、そこには注意の集中が要求されてくる。楽しさは泳ぐ人の心に生じてくるもので、フロー体験は単なる身体的な動きの中だけに求められるもの ではなく、心がつねにかかわりをもっていることが分かる

末延岑生　「ことばと教育（12）ことばの元を探る［12］」

神の存在を信じようと信じまいと、人は喜怒哀楽を感じることができる。中でも、誰 もが最も歓迎する身近な感情は「喜び」である。われわれがこの世に存在すること自体に対する喜び、体と心をもつことに対する喜び、良くも悪くもそれを使え ること自体に対する喜びがあるはずである。喜びの感情は、何かを達成したときだけに起こる刹那的なものでなく、連続的なものでありたい。だが、人はただ、 そうした連続的な喜び方を知らないだけで、それができないのはその受け皿ができていないからである。

神は人間になぜからだを貸し与えたかを考えるとそれが理解できる。天の理によれ ば、自分の本体は魂であって、からだは親神から借り受けている。人は魂の存在と結びつくことによって身体となるが、魂だけでは精神的な喜びにすぎず、喜び をからだで直接に味わうことができないだろうから、神はからだを貸したと考えられる。中でも親神は、ことばを使うことができるように、数々の器官とそのシ ステムをわれわれの体に仕込んできた。感覚器官は、外界からの生きる喜びを、味覚や視覚だけでなく、ことばとして表現することのできる器官である。これを 私は “喜びの器官”と名づけたい

笹田勝之　「天理教における「さとり」の構造について―他宗教との比較を通して―（16）第二章「悟ること」について（４）」

鎌田茂雄氏は「理事無礙法界」について、仏性と衆生の例をあげて「衆生というのは仏性が現起したものであって、衆生が悟れば仏性になり、仏性が迷っているのが衆生で、まさに衆生と仏性は無礙の関係になっていく」世界であると言う。

堀内みどり　「天理異文化伝道（25）天理教のコンゴ伝道［24］―２代会長時代〈1967～1971〉［５］」

工藤誠悦一家が帰国し、ルカク布教所に谷徹也が着任した。谷は、将来の布教所用に 村長から提供された土地の近隣に井戸を掘りあて、懸案の水の確保に成功した。谷の活発なおたすけ活動は土地の人々から信頼を得ることになり、布教所一円に 天理教が浸透していった。奥地からのおたすけ要請が相次ぎ、カイ青年の出身地へ出掛けることになった。そこはピグミーの人々が隣接して居住し、彼らにもお さづけが取り次がれた。ピ

グミ一一族族は天理教を受け入れることに合意し、礼拝所用の土地も提供されることになった。

小林正佳　「芸術・癒し・宗教（27）―自然なリズムへの同調」

民俗舞踊の動きの特質は、何よりその動きが「自然」である点に求められる。そうし た動きの特質は、実際に民俗舞踊を踊る場面でどのように働き、逆に、民俗舞踊を踊る仕組みの中からどのように育てられてくるのか。自然な動きであるからこ そ可能な関係というのが確かにある。あるいは、そうした関係に身をおくことで、一層自然な在り方が再強化される。

一方、共同体といった緊密な人間関係であればあるほど、民俗舞踊を通して実現する ような身心両面にわたる同調があってこそ、人間の共生は一層可能になる。この時、同調とか共感とかいった出来事は、人間と人間のあいだに生じるだけではな い。あらゆる自然現象が一定の波動の中で生起している。そうした宇宙的な波動の重なりの中に、わたしたち人間もまた、自分自身の身心のリズムを同調させて ゆかなければならない。自分の中の波動に気づき、もっと大きな自然の波動の中に自分自身を位置づけてこそ、同じ波動に共鳴する人間どうしの同調がさらに可 能になるだろう。

小滝　透　「天理比較神秘論への試み（27）修行論［３］」

今回は、大多数の宗教が採用する自力と他力の折衷された修行論―とりわけ密教の修行論（三密加持）と天理教の修行論―について述べ、その背後にある宗教の持つ神秘主義的要素について言及してみた。

金子珠理　「ジェンダー女性学情報（25）　生殖技術とジェンダー［３］

アメリカの 19 世紀半ばからの反堕胎運動 における人種、階級、ジェンダー問題に言及しつつ、当時のフェミニズムにおける堕胎観、および宗教界の反応を概観する。以降百年間にわたる堕胎非合法時代 にも実際には堕胎は行われ、悲惨なケースが多かった。そうした中、宗教界からも中絶斡旋サービスが登場してくる。

塩澤千秋　「脳死・臓器移植―カナダ通信（21）医学研究の行方［５］」

　研究者の興味、名誉心の満足、そして利益の追求のままに人間の根本遺伝子まで変えていこうとする医学の方向、人間の生物的定義をしなければならない世界が現れてくるのではないか。今こそ生命をしっかり捉えねばならぬ時である。